湘南医療大学
ティーチング・ポートフォリオ

大学名　湘南医療大学
所　属　保健医療学部　看護学科
名　前　石橋　史子
作成日　2024年 9 月 29 日

1. 教育の責任

本学は看護学科の大学であり、多くの学生は卒業後看護職に就く。私は、今後、看護職に就く学生を広い社会的視野も持った医療者を育てる必要があると考えている。特に私自身が助教であるため、実習指導を行う上で、机上の学修だけでは学べない患者の個別性に合わせた看護ケアの大切さについて学生が肌で感じられるように支援することが私の責務と考えている。また、現在は、2 年生チューターとして 14 名程度の学生の生活・学習面でのサポートを行っている。大学生となって、健康面や学習面での問題を抱えサポートが必要な学生も多く、科目履修状況の確認や個別面談や実施しており、学生生活をサポートする責任もある。

以下に記した科目を担当している。

担当科目:

薬と毒性学入門・

・看護基盤実習Ⅰ

・ナーシングスキルⅡ

・プロフェッショナル論Ⅰ

・看護基盤実習Ⅱ

・成人看護方法論Ⅱ

・成人看護方法論Ⅲ

・ナーシングプロセスⅡ・

・慢性期看護実習

・統合実習

・看護研究

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私が教員として大切にしていることは、「患者へ配慮した接し方を大切にすること」、「知識をつけるうえで、自分自身が自ら考えながら行動できる」、「患者を全人的に捉えて看護をする」という3つである。学生は、4年間の大学で学内の講義や実習での学びを深め、なぜこれら3つが必要となるかを理解したうえで、臨床現場で患者にとってより良い看護を行えるようになってもらいたいと考える。

2) 理念をもつに至った背景

私が、大学病院で約10年勤務していた。その中で看護をする上で学びとなったことが、「患者へ配慮した接し方を大切にすること」、「知識をつけるうえで、自分自身が自ら考えながら行動できる」、「患者を全人的に捉えて看護をする」の3つである。

入院中の患者は、 衣・食・住をカーテンで仕切られた空間で行い生活している。

その狭い空間で治療をしながら、治療が辛いと感じ、不安を抱えながら入院生活を過ごしている方も多い。そのような中で医療者の訪室時にカーテンの開け方ひとつで、プライバシーの配慮不足だと感じている患者も少なくない。だからこそ患者へ配慮した接し方が患者が安心して入院生活を送ってもらうためにも大切であると学んだ。

また、看護を行う上で、指示されたことをそのまま行うのではなく、実際に自分自身で考えて行うことが大切であることを学んだ。特に、私が尊敬する病棟の師長は、ナイチンゲールの『看護の覚書』の「小管理」の考えを重要視していた。患者により良い治療環境を整えるために、自然治癒力を向上するため環境整備の大切さや、どの看護師も一定以上のケアが提供できるように各自が看護技術を磨くように指導いただいた。また、管理者の不在時でも、患者にとってより良い看護をその時々に判断できるように自らが考えて行動できるよう知識をつけていく必要性を感じながら日々、臨床現場に立っていた。

また、私が勤務していた病院の看護部は、患者を疾患だけで看るのではなく、精神的、社会的側面などを含めて全人的に捉えてアセスメントして看護していくことの大切さを勉強会で伝えていた。そのため、私のこれまでの経験から上記3つの自分自身が大切としたい理念となった。

3. 教育の方法・戦略

上記に記載した理念を実現するために私が行っている方法を以下に述べる。

1） **講義内容は、基本的な知識が定着できるようにわかりやすい内容を心掛ける。**

講義内容は、学生の知識を定着させるために重要である。しかし、学生は多くの知識を学ばなければならなく、一つ一つの講義を集中して受講できない者も多い。そのため、授業構成として、基礎的な解剖整理から疾患の病態、看護というように段階を踏んで作っている。また、看護師国家試験問題に早めに慣れてもらえるように、頻出内容や過去問題に触れる機会を作っている。また、学生には講義資料を自分のノートとしてもらえるよう、白黒刷りにして、重要箇所を穴あけした資料を作成し、学生自身が重要箇所を記入し、色付けしてもらえるよう工夫する。講義の構成として、学内の勉強会に参加や、領域内の他の教員に意見をもらい内容の検討を実施している。

2） **学内演習では、ただ正確に技術を行うだけを教えるのではなく、患者に接するうえで大切な点についても伝える。**

学内演習は、臨地実習に出る前の技術を身に着ける上でも重要である。しかし、それ以前に、ユニフォームを正しき身に着け、医療者として身だしなみを整えることの必要性を身に着ける上での重要となる。そのため、演習時は、学生の身だしなみについて確認し、不適切な場合は、ただ注意するのではなく、なぜ改善が必要であるか学生自身が理解できるように取り組む。

3）　**臨地実習では、個別性あるケア（患者に合ったケア）を提供できるように支援する。**

学生が患者に合ったケアを考えられるようになるためには、患者を身体的、精神的、社会的な側面を含めて全人的に患者をとらえてアセスメントできることが必要となる。そのため、患者を全人的に捉えることができるようにアセスメントの視点が見えてくるように支援する。また、学生がアセスメントし、看護ケアを考えてきても標準的内容が多いため、対象となる患者に合ったケアを具体的に確認しながら一緒に考えてケアを実施する。臨地実習の指導が向上できるよう学内の勉強会に参加する。

4）　**臨地に出た時を見据えて、社会人として必要となる内容を伝えていく。**

臨地実習では、学生自身も学内の勉強だけでは学ぶことができなかったことに関して、臨地と学内の学びにギャップを感じの出来事も少なくない。また、接遇面、マナー面などこれまで学内ではあまり気にして生活してこなかったことに関しても配慮して臨地実習を行わなければならないことから指導を受ける学生も多い。指導されたことが、なぜいけないのかしっかり理解できるように理由を学生自身が考え、向上できるように支援する。

4.　学習成果

1）学生からの講義の感想として、講義資料の重要箇所を空欄するなどにすることで、授業に集中して取り組むことができたとコメント記載が多くあった。

2）臨地実習で、実際に患者にケアを一緒に行う際、モデルとは違いむずかしさを感じたが、だからこそ患者に合ったケアの検討が必要であることが理解できたと、実習後の感想があった。

3）臨地実習で実際の患者のアセスメントをする際、知識不足が痛感したが、実習で調べたことが知識として身についたと学生から感想があった。

5.　改善のための努力

1）学生の理解しやすい授業設計をする。

方法：学生に講義の感想を記載してもらい、学生の授業の反応を確認し、授業設計の改善を図る。

2）学生の学習のタイミングを見極め指導方法

方法：臨地実習において、学生の体験と看護概念や看護実習を意味づけられるようにする。その際、学生に伝えるタイミングや指導方法についても学生の特性を理解してかかわるようにする。

6.　今後の目標

1）短期目標

・講義内容（授業設計）の見直しを実施　（2025 年年2月末まで）

・担当する講義の基礎的な内容の知識不足している部分を再度勉強する。（2024 年2月末まで）

・実習の病棟間の調整方法の見直し（2024 年 12 月末まで）

・学生指導の見直し（対象学生への伝え方）（2025 年 1 月末まで）

2）長期目標

・高い学生満足度学習効果が得られる授業を展開する。（2025 年3月末まで）

・臨地実習において、学生の実習環境を整え、理解しやすい指導方法へ改善を図る。（2025 年3月末まで）

【添付資料】

なし